





# 戦争と性と革命

大西巨人批評集

## 大 西 巨 人（おおにし・きょじん）

小説家・批評家。第二次大戦中、一兵卒として約四年間、在軍隊。敗戦後約二年間、九州にて総合雑誌『文化展望』の編集担当。『精神の氷点』（改造社）、『神聖喜劇』（光文社）などの作品がある。新日本文学会会員。

現住所 浦和市上木崎字皇山 559 の 22



## 戦争と性と革命——大西巨人批評集

---

**SANSEIDO BOOKS 3**

昭和 44 年 10 月 15 日 初版発行

**定価 550 円**

|       |                                                                                              |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 著 者◎  | 大 西 巨 人                                                                                      |
| 発 行 者 | 株式会社 三 省 堂<br>代表者 小 倉 正 風                                                                    |
| 発 行 所 | 株式会社 三 省 堂<br>東 京 都 千 代 田 区 神 田 神 保 町 1 の 1<br>電 話 東 京 (293) 3441 (大代表)<br>振 替 口 座 東 京 54300 |

---

<B3 性と革命>

0395-661003-2774

大西巨人批評集

目次

## 第一 俗情との結託

俗情との結託 3

再説俗情との結託 18

映画『陸軍残虐物語』のこと 37

## 第二 批評の彈着距離

批評の彈着距離 45

批評家諸先生の隱微な劣等感 58

円地文子先生の性的淺智慧 84

経産婦か否かの觸覚による確認は常に可能か 101

大江健三郎先生作『われらの時代』の問題 116

同性愛および「批評文学」の問題 134

映画『尼僧物語』について 155

映画『わらの男』について 163

あさましい世の中 169

女性作家の生理と文学 172

### 第三 独立喪失の屈辱

独立喪失の屈辱 189

真人間のかぶるものでない帽子 191

「あけぼのの道」を開け 195

籠れる冬は久しかりにし 202

創造の場における作家 209

冬を越した一本の花 215

横光利一の死 222

太宰治の死 225

天皇を見るの記 227

兵隊日録抄 229

### 第四 ハンセン氏病問題

ハンセン氏病問題 241

文学の明るさ暗さ 280

# 第一 俗情との結託



## 俗情との結託

最も有産者の保守性の露骨な一人の作家の作品（『三木清に於ける人間の研究』）と明らかに革命的・民主的な立場を標榜する一人の作家の作品（『真空地帯』）とを「俗情との結託」という忌まわしい表題で一括りに論ずることは、一見奇妙にして無理なようである。所詮前者の文学が、世俗的な物との結託の上に成立していても、あるいはむしろ「俗情との結託」そのものでしかあり得なくても、後者のそれは、まさにほかならぬ俗情の拒否、世俗的な物との格闘に立っているはずではないか。しかしわれわれの文学は、非常に複雑な現象である。『真空地帯』の作者が神田共立講堂の演壇で「私は、いかなる怒濤のなかにも絶対に後退せずに乗り切って生きて行きたいと考えております。」（『葦』初夏号）と語ることと、彼の実作が多かれ少なかれ俗情と結託することによって革命的・民主的な領域から「後退」することとは、遺憾ながら矛盾しないのである。

今日出海の『三木清に於ける人間の研究』は、発表当時、それがいわゆる「実名小説」であること

によつて相當に論議の種となつた作物である。しかしここで私は、今日出海の作品が「実名小説」であること（しかも「死人に口なし」の立場から書かれていること）を問題にしようとするのではない。「三木清に於ける人間の研究」は、そういうこととは独立にも、三木清ではなく当の作者今日出海「に於ける人間の研究」に好個の資料を提供しているのである。世俗的な物との無条件結託に制作の動機を持ったこの作品は、作中人物「私」ならびに彼と完全に密着した今日出海が、人間および作者として一般的・日常的にも十分に俗情と結託していることを、生々しく物語るのである。次ぎの部分において、それは、特徴的に読み取られるであらう。

「ところで男ながらヒステリックな発作に襲はれるのは氣候のせゐばかりでなく、性生活の不均衡といふこともあつた。ホテル生活をしてゐると隣り近所が余りに近く、性慾を抑圧してゐると妙に神経質に他人の行為が氣にかかり、口うるさくなるものだ。それで互ひに牽制されて却て一層内訌し、次第に刺刺しい表情を作るやうになつてしまふ。私は徴用になる一、二年前に仏蘭西へ独り旅をした経験があるのでよくわかつてゐた。石渡のやうに生来身体が弱ければ兎も角、普通の健康人が無理な禁慾生活をするると忽ち神経衰弱になつてしまふ。そこで私も時々大野と晚餐を済ませ、彼を部屋へ送り込み、例の土俵入りまで見届けてから、柴野やその他の悪友と青楼へ登ることが度だった。」

「私は三木がいつも異常に神経をたかぶらせ、金切り声を張りあげて、人の悪態を吐くのは、頑健な身体を持ちながら、哲学者とか思想家といはれては女郎屋へも行けず、禁慾生活が異常昂奮を募らせてゐるのではないかと推察した。

『三木さんも孤高な生活をよして、少しは悪童と遊ばないと神経衰弱になるぜ。実に清潔な家もあるんだから、一度御案内しようかな』

三木は軽蔑する時に漏らすふんといふせせら笑ひの後に辛辣な鋒先を私に向けてきた。

『いまに国際性病に罹るよ、そんなことよりも君たちは性慾をどう考へてゐるんだい？』

『どういふものか哲学的に思辨したことはないけど、これ进行处理する方法は辨へてゐるね』  
私の答へに一座は笑った。

この作中人物三木は、彼の性慾を手淫によつて処理してゐるのである。そこで「性慾を処理する方法は辨へてゐる」で「青楼へ登ることが度度だった」「私」は、三木を「異常に熾烈な性慾や不潔な行為を平気で語る如く、彼には微妙さが欠けて、奇怪さが目立つ男」として軽蔑・嫌悪するのである。「私」にとつて、手淫は「不潔な行為」であり、それを「平気で語る」のは「微妙さが欠けて、奇怪さが目立つ」事柄であるけれども、「青楼へ登ることが度度」あり、それを人前で「平気で語る」だけでなく「実に清潔な家もあるんだから、一度御案内しようかな」と牛太郎役を買つて出るのは、決して「不潔な行為」でもなく、「微妙さが欠けて、奇怪さが目立つ」事態でもない。他の作中人物石渡は、「内地へ歸つたら、僕は『哲学案内』を焼き捨てますよ。手淫の産物を罪のない子供に読ませたくないからね」ともつともらしいことを言っている。しかし彼が「罪のない子供」に女郎買ひの産物を「読ませたくない」と「私」に告げた様子は、皆目ない。この買春という「不潔な行為を平気で語」り「微妙さが欠けて奇怪さが目立つ」「私」や「手淫の産物」は拒否しても女郎買ひの産物は尊重するらしい「奇怪」な石渡やを、作者今日出海は、終始肯定してゐるのである。

総じて「私」および「私の答へに笑った」「一座」の人人、したがって今日出海にとつては、ある「普通の健康人」が——よし彼が既婚者であつても、——一定期間他地方に単身で旅行・出張した場合などに「青楼へ登ることが度度」あるのは、人間が三度の食事をするのとおなじくらいに、尋常かつ正当な行動なのである。たとえ旅行・出張しなくても、独身男子は、「度度」売春婦に接するのが当然といふことになるのであらう。のみならず、買春その他を行なわずに「孤高な生活」をしている人間は、今日出海などの忠告ないし軽蔑の対象とならねばならず、もし彼が金で女を買うことを拒否して性慾処理の道を手淫に求めたならば、そのとき彼は今日出海から「奇怪」な男として取り扱われることを甘受しなければならない。

まして人間が、ある条件の下で性慾処理・青楼行きの問題に直面して、そこに深刻な社会的・道德的——一夫一婦制の、純潔の、売淫の存在その他についての——問題を発見したり悩んだりすることは、今日出海らの目には野暮の骨頂、お話しにならぬ滑稽、非人間的な事柄と映じるのであらう。

大衆時代小説作家S某が「妻以外には童貞」であるということが揶揄的なゴシップとして流布されるような事情、ある青年が結婚まで童貞であつた場合それが一種の軽侮の意味を含んで「めずらしい」現象とされるような事情、中野重治が十年前に里見弴について「たとえば『安城家の兄弟』のなかで、妻をまごころで追究する主人公が自身のポリガミーについては全く疑問なしでいることなどとの繋がりがいしられ、この作家の哲学的全貌が描かれねばならぬのであらう。」（『文学』における文学と人間との問題）と書いたような事情、その里見の「哲学的全貌」は必ずしも今日まで描かれずに里見は相変らず「ポリガミー（二夫多妻）」の手放しの肯定に立ちつつ下作な「娼捨」その他を発表し

て納まっていられるような事情、——これらの事情が、低劣俗悪な『三木清に於ける人間の研究』の成立とその一種の大衆的人気の獲得とを可能にしているのである。

自己および自己の仲間の性的・道徳的頹廢については無限に寛容または無感覺な（というよりもむしろそういう頹廢をこそ人間の正当健全なあり方であると考えて主張する）「私」ないし今日出海も、もし留守宅で彼の妻が「度度」でなく稀れにでも他の男性によって性慾を処理したならば、決してこの妻（の行為）を寛容することがあるまい。それどころかこういう人間は、かえって彼の妻に少しも仮借することなく道徳的完全を要求するのではないか。里見について中野が書いた前記の文章もこのことに関連しているのであるが、おなじ中野が一九三七年に「ある種の革命家などが、与えられた特殊・複雑な条件の下で、二人以上の異性と性的關係を結んでいた場合、それが一人の次ぎに他の一人が來たのであっても、『革命家にあるまじき乱倫』として、この種の（封建的な物・ブルジョア的な物に荷担する類の）批評家に叩かれるのに反して、他のある種の人間の場合では、妻妾同棲というようになことにについてさえ、同じ批評家によって『男の甲斐性』がほめそやされ、『隅におけない』などところり羨しがられさえするのである。」（『一般的なものにたいする呪い』）と書いた事情にも、これは深く関係しているのである。

「市村半四郎は赤坂の芸妓と切れて、むしろくしゃしてゐた矢先、白洲銀子の楽屋姿を見て、まるで憑かれたやうに夢中になった。銀子には芸妓に見られぬ氣品があった。では素人の貴夫人かといへば新劇の女優であり、聞けば男の経歴も少くないといふので、新しい物好きな歌舞伎役者がとびつくには恰好の存在だった。それにしても彼らは徳義心が少いといへば語弊があるが、人の持ち

物でも欲しいとなれば我慢せぬところに古代暴君の面影を残してゐることは事実である。」(女と將軍)

まったく低俗化された永井荷風紛いの筆触で大正中期から戦後に亙る一人の女の色情生活の転変を追う別の小説の中に、今日出海は、こう書いている。最後の一句切りに見られる今日出海の批判的感懐は、みずからの愚劣なエロ話しに打ち興じ相好を崩して本性をさらけ出していた男が、ふいと威厳を人前に取りつくるおうとして開き直り、取ってつけたように真面目腐った教訓を挿入する図にも似て、すこぶる滑稽である。「とびつくには恰好の存在だった」云云が作者自身の与えた判断(客観叙述)であることからしても、全篇を通じる作者の文学態度からしても、この感懐は、全然唐突にして見え透いた付け焼刃でしかあり得ないけれども、そのまた感懐内容を書きつける作者が、明らかに「徳義心」の欠除以外の何物でもない不徳義・頹廢現象を批判(?)するのには、「徳義心が少いといへば語弊があるが」などと恐ろしくお上品ぶった控え目な筆遣いをしている事実は、顧みて他を言うというか、語るに落ちた道化の醜状であらう。こういう男女関係の考え方・推移を「徳義心が少い」あるいは徳義心皆無と呼ぶことの、どこに「語弊」があるか。「青楼へ登」らぬ三木にたいしては相手を血祭にも上げんばかりの勢いで動いた筆が、人妻と行き当たりばったりに通じる市村半四郎を「徳義心が少い」と書くことには一種のためらいを示すことこそ、実に「不潔」で「奇怪さが目立つ」現象でなければなるまい。

五、六年前、舟橋聖一の下劣小説『その一日』を痛撃して「人の子は悲しきもの、主ある花にも恋ひこがれ思ひ乱れるものであるが、その人の子の苦しみがあらゆる道義のもとである。世の流行はど

うあらうとも、文学の世界に於ては。」（『墮落論』所収「文芸時評」）と言った坂口安吾は、あの舟橋聖一やこの今日出海やよりも遙かに健康であり、前進的であつた。言うまでもなく性・男女の關係も、また非常に複雑な現象である。その複雑さを通して新しい道徳を摸索していた坂口なりの当時の努力が、そこに見出されたのである。今日出海は、「封建性の残滓を清算などと、言葉では簡単に云へるが、残滓どころではなく、封建性の不合理性にさへ気がついてゐない人が多い。」（『新潮』七月号）と——彼自身は「気がついてゐる」てその「清算」に努力する人であるかのように——乙に構えて言っている。しかし実は当の今日出海こそが、まったく「封建性の不合理性にさへ気がついてゐない人」、または「気がついて」はいるけれども諸種の都合上それを守ろうとする人なのである。そういう今日出海に「多い」人人の一人が、まさしく今日出海なのである。

男女同権・民主主義國家をその支配者層が自称するアメリカ帝國主義軍將兵の日本における目に余る買春風景も、日本帝國主義軍報道班員たちがマニラの青楼にしばしば登るのを肯定・推奨した今日出海から見れば、当然極まる正常事ではなればなるまい。

三木の性慾處理問題に関する「私」ないし作者の態度は、一篇の『三木清に於ける人間の研究』ならびにその作者今日出海の性格・本質を特徴的・象徴的に物語っている。それは、この作品が（現代まだ勞農市民・國民大衆〔特にその遅れた層〕の中に広汎に存在する）封建的・後退的要素すなわち俗情と結託することによって書かれ、それと結託することによって讀まれた、という事實を指示するとともに、現在また今日出海が帝國主義反動の狡猾極まるイデオログとして俗情との結託・俗情の保守のために積極的に努力した、という事實を証拠立てる。——かくて『三木清に於ける人間の研

究」は、いわゆる「俗流大衆路線」の言わば極地に位置する作品である。

『三木清に於ける人間の研究』に存在するのは、作者の目的意識的な・主観的な俗情との結託であるが、『真空地帯』に存在するのは、作者の主観に必ずしもよらざる・無意識的な、しかし客観的な俗情との結託である。言い換えれば、作者の不明、誤解、糞真面目が、結果として俗情に荷担し、「俗流大衆路線」に足を掬すくわれた形になっているのである。すでに『真空地帯』という題名の選択・決定の由来が、この間の消息を雄辯に物語っているであろう。

『軍隊内務書』の「綱領」十一は、次ぎのごとくであった。

「兵営生活ハ軍隊成立ノ要義ト戦時ノ要求トニ基キタル特殊ノ境涯ナリト雖モ社会の道義ト個人ノ操守トニ至リテハ軍隊ニ在ルガ為ニ其ノ趨舎ヲ異ニスルコトナシ。(後略)」

兵営ないし軍隊を「特殊ノ境涯」として規定し成立させようとしたのは、ほかならぬ日本支配権力・帝国主義者であったのである。絶対主義的帝国軍隊の部分に組み入れられた上官上級者が新入隊兵にまず浴びせかけた言葉は、「軍隊は、地方とは訳が違ちがうぞ。……貴様は、地方人のような気でおらんじやろう。……地方ならともかく、軍隊では、……。」などであって、また一般人が入隊兵に与えた言葉も、「兵隊は、世間とは別世界だからそのつもりで気をつけて……」の類であった。本質的に別世界であり得ず到底資本制社会・絶対主義国家の部分である兵営を「特殊ノ境涯」とする上からの規定は、彼ら支配権力が「此時このときに於て兵制を更あらため我國の光を輝さんと思ひ陸海軍の制を」(『勅諭』)建

設した明治初頭以来約半世紀の間に、国民大衆にむかつて強力な現実的ならびにイデオロギー的攻撃として強制されつづけた。そして支配権力の企図は、成功的に遂行されたのである。それは、一方では兵營がある意味における「特殊ノ境涯」として成立させたとともに、他方では人民大衆の頭に兵營を別世界とする固定觀念を植えつけた。この固定觀念が国民大衆の封建的・後退的な要素と結合していた・そしていまもしていることは、言うまでもあるまい。かくのごとくして兵營は、言葉の世俗的な意味においてはたしかに「特殊ノ境涯」であつたが、その真意においては、決して「特殊ノ境涯」でも「別世界」でもなく、最も濃密かつ圧縮的に日本の半封建的絶対主義性・帝國主義反動性を実現した典型的な国家の部分であつて、しかも爾余の社会と密接な内面的連関性を持つ「地帯」であつた。兵營を「特殊ノ境涯」とする上からの規定は、そこでの半封建的絶対主義性・帝國主義反動性の高度な実現を容易にするためのズウズウしい方式であり、その実現にたいする人民大衆の抵抗の封殺・排除のための臆面もない手段であつた。したがつて兵營を言葉の本質的な意味において「特殊ノ境涯」と認めることは、社会的現実の重大な誤認であり、世俗的な意味において同様に認めることは、軍国主義的絶対主義にたいするたたかいの放棄・屈服以外の何物でも、かつてなかつたし、現にない。日本支配権力にたいして多かれ少なかれ宣戦し抵抗した精神は、兵營を前後いづれの意味においてでも（この世にあり得ず、またあるべきでないところの）「特殊ノ境涯」と認めることを——公然とか、心中ひそかに——断じてがえんじなかつたはずであらう。

敗戦とともにいったん消滅した（そしてその消滅の永久なることが心から願われる）日本帝國主義軍隊・兵營を今日の見地から批判的に描くに際して、それを「特殊ノ境涯」と認める立場に拠ること